

ま ち の 話 題

『しいけど難しいね』 鷺巻地区公民館 大正琴講習会

鷺巻地区公民館では、一月二十二日から三月十九日まで大正琴の講習会を開催。二十一人の受講生が「さくら」や「荒城の月」などの曲を熱心に練習しました。

三月九日は五回目の練習日。この日の練習曲は「花かげ」です。「ちょっと難しくなつたでしょう」という先生の言葉どおり、指が思うように動かず、苦勞している人も。受講生の内藤さんは「大正琴は初めてやってみました。家で一人でもできるからいいですね。だんだん難しくなるけど、楽しいですよ」と話していました。



『コンピューターを勉強』 市板金工業組合

市板金工業組合（大那孝組合長、組合員二十九人）は、二月二十日勤労者福祉センターで講習会を開き、約二十人が参加しました。

今回の講習は、これまでの技術中心とは違って変わって経営面重点の講習に切り替え、「板金業の体質強化と受注拡大策」と題した講演と「コンピューターによる見積書の作成と実演」を行いました。

受講生たちは「手先は器用なのだが、コンピューターやワープロはどうも」と慣れない手つきでキーボードを打っていました。新しい試みだけに皆さん真剣そのものでした。



大 風合戦がうらやましい 北海道本別町

北海道本別町から五人の青年が、二月二十二日青年団体活動や地域づくりの研修に本市を訪れました。本別町は十勝平野の東北に位置し、酪農など農業が盛んな町。源義経が衣川の急襲を逃れ本別町に着いたという伝説を持つロマンあふれる町です。本市からは十五人の青年が交流会に参加。青年団体の活動やまちづくりについて熱の入った意見を交わしました。本別の青年たちは「白根市は全国的にも有名な大風合戦があつてうらやましい。私たちは「義経の里」としてまちづくりを進め、全国に売り出したい」と話していました。



地域密着の生徒会活動 新飯田中学生会

青少年健全育成市民会議が青年教育センターで三月五日開催され、善行青少年等の表彰、講演などを行い、青少年健全育成の推進を誓いました。

善行青少年等の表彰は、新飯田中学校生徒会を表彰。地域の環境美化のためごみ収集を行った「クリーン作戦」、七十歳以上のお年寄りに敬老の日に激励の手紙を手渡した「レター作戦」などの生徒会活動に対し表彰されたものです。また、青少年健全育成指導員として長年活躍された、小林三千夫さん（館）、小山敏矢さん（道湯）、熊倉一義さん（高井興野）に感謝状が贈られました。



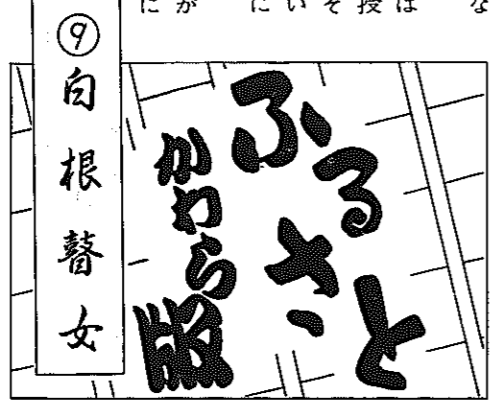
替 女

明治以前の越後には、多くの替女がいました。替女たちの多くは眼の不自由な女性です。今日のような医療機関がなく、不衛生な環境でしたから、眼病にかかって視力を失う人が多かつたようです。替女の中には晴眼者もあり、旅には先頭に立って「手引き」という道案内人になりました。

村々をいったようです。ですから、やそ替女は小林地区出身なのかもしれません。それで、ここでは白根郷の替女集団を仮に「白根替女」と呼んでおきたいと思えます。

白根 替女

白根替女はしだいに分派に枝



白根にも替女が

「新飯田替女」（鈴木昭英・昭和五十一年・長岡市立科学博物館研究報告）という論文を見ると、江戸時代から近代にかけて白根を中心に活動した替女集団があつたことが分かります。

この論文に掲載された文化十四年（一八一七年）の古文書には「小吉やそ替女」の名前が見えます。小吉とは江戸時代に、広義には現在の白根市全域を、狭義には低湿地の戸頭、大谷地などを取り巻く、下木山周辺の

別れして、「白根組」「新飯田組」などの親方集団ができていったようです。白根郷の替女たちは自分たちを「御講組」といつていたそうです。

残念なことには詳しい資料が伝えられていませんが、白根替女が蒲原平野を舞台に独特な芸能活動を披露していたことが想像されます。現代でいえばさしずめタレントさんと宗教人を併せたような感じで尊敬されていた

蒲原 口説

白根替女たちがどのような歌を歌っていたか、古い時代のものはよく分かっていません。しかし、今日伝えられている「蒲原口説」は白根替女たちが三味線に合わせて歌つたものです。少し紹介しましょう。

越後蒲原です蒲原で
雨が三年日照りが四年
出入り七年、困窮となりて
新発田様へは御上納できぬ
田地売ろかや子どもを売ろか
田地や小作で手がつけられぬ
姉はじゃんかで金にはならぬ
妹売るとして相談決まる

この歌は白根（新発田領小吉郷）の実情を地元で替女が正しく歌つたものと分かります。

また、古川にお住まいの大那作平氏の叔母のノイさんがかつて十二歳から二十三歳まで替女をしていましたが、結婚のため廃業したそうです。今は胎内やすらぎの家で九十三歳でご健在のことです。



教育委員会社会教育課 佐藤 正 則

このシリーズの①②で、人間社会と学習の関係について考えてきましたが、今回から生涯学習（生涯教育）が提唱された背景をみてみたいと思います。

ユネスコで提唱

二十五年前、ポール・ラングランがユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の会議で「永続的な教育」と題して、生涯教育の概念を初めて提唱しました。

ユネスコは、「人間の心の中に平和のとりを打ち立てる」ことを目的とした機関です。ユネスコでは当初から発展途上国の「文盲退治」を推進していました。しかし、近代社会に不可欠な、自分の考えや気持ちをほかの人と交換できる「コミュニケーション能力」を高めることにはならないことに気付きました。そこで、文盲をなくした上でコミュニケーション能力を養わせること。これが、一人ひと



りの自由な意思決定を可能にする教育であるという考えに着目したのです。このことが民主主義を育て、ひいては平和と国際理解を押し進めることになると考えるようになったわけです。ポール・ラングランは生涯教育について次のように述べています。

挑戦の連続と決断

人間の一生は挑戦の連続であり、決断しなければならぬ事柄は昔からあつた。人々はそのために情報を集め、自らの見識を高めていた。より高い見識を持つた者のみが、より優れた判断ができた。だから、生涯にわたつての教育は昔からたいせつであつた。

現在の人間社会の環境は「決断」を要することが多くなつていく。このような時代であるからこそ「生涯教育」がごく少数の選ばれた人々だけでなく、すべての人に必要になつてきた。

このように、世界で初めて生涯教育の考え方が示されたのです。